

日本語の擬音語・擬態語知覚

—母語話者，学習者，非日本語話者の比較から—

An Exploration of Japanese Mimetics Perception: Comparisons among Native Speakers, Adult Learners, and Non-Speakers of Japanese

内藤 由香 NAITO-BILLEN, Yuka

● カンザス大学東亜言語文化学部

Department of East Asian Languages and Cultures, University of Kansas



Keywords 日本語，擬音語・擬態語，口蓋化
Japanese, mimetics, palatalization

ABSTRACT

本研究では，日本語母語話者が擬音語・擬態語を知覚する際，「口蓋化の音象徴」(Hamano, 1986, 1998)を利用しているかどうか，また，それが日本語特有の法則性か，あるいは言語に普遍的な法則性かを検証した。実験では，日本語母語話者，学習者，非日本語話者に実際に存在しない擬音語・擬態語の新語を聞かせ，「口蓋化音」を含む擬音語・擬態語（「カチャカチャ」等）が「口蓋化音」を含まないもの（「カタカタ」等）と比較して，より“UNCONTROLLEDNESS”（子どもっぽさや制御できないエネルギー）を伴った印象を与えるかどうかを，聞いた音声により近い描写を二種類の絵から選ぶ形式で判断してもらった。その結果，日本語母語話者と非日本語話者には「口蓋化音」を含む条件により“UNCONTROLLEDNESS”を感じている傾向が見られ，「口蓋化の音象徴」が言語に普遍的な法則性であることが示唆された。一方，日本語の擬音語・擬態語未習の学習者には有意差がなかった。実験結果をふまえ，効果的な擬音語・擬態語の導入法を考察する。

This study investigated whether native and non-native Japanese speakers process Japanese mimetics (sound symbolism) based on language-specific or language-universal linguistic rules. In particular, this study focused on the perception patterns of palatalized and non-palatalized mimetics. Hamano (1986, 1998) pointed out that palatalized sounds within a Japanese mimetic (e.g., /katya-katya/) often convey an uncontrollable, childish,

or extreme feel when compared to its non-palatalized counterpart (e.g., /kata-kata/). However, it was not clear whether these palatalization characteristics can be used as a rule to generate or learn new mimetics. Native speakers of Japanese, English speaking learners of Japanese, and non-speakers of Japanese whose native language is English participated in this study. Participants listened to novel mimetics and matched sounds with pictures presented on a computer screen. The results indicate that native speakers of Japanese and non-speakers of Japanese utilize the palatalization rule, which suggests the universality of the palatalization rule. However, the learners in this study did not yield significant differences. Effective ways to introduce mimetics to the learners are discussed.

1. 研究の背景と課題

日本語には数多くの擬音語・擬態語が存在し、日本語母語話者にとっては、擬音語・擬態語は日常生活から切り離せない、物事の描写に欠かせないものであると言えよう。しかしながら、音と意味の関係は、多くの場合曖昧である。音の描写である擬音語はともかく、状態・動作や感情の描写である擬態語（ツルツル、ネバネバⁱ⁾と擬情語ⁱⁱ⁾（ワクワク、ヒヤヒヤ等）は、日本語母語話者以外には捉えがたいものであり、日本語の教育現場で擬音語・擬態語を教えることの難しさも、しばしば指摘されている（e.g., Hamano, 1986, 1998; Iwasaki et al., 2007）。とはいえ、擬音語・擬態語の全ての性質が、日本語固有のものであるわけではなさそうである。例えば、形やサイズと、それらに与える名前の音との関連性（例えば「ア」は大きいもの、「イ」は小さいもの等）は多くの言語で共通して見られる（e.g., Huang et al., 1969; Kohler, 1929, 1947; Ramachandran & Hubbard, 2001）ことから、言語に普遍的な音韻規則があることも示唆されている。日本語においては、数多くの既存の擬音語・擬態語が存在するばかりでなく、新しい擬音語・擬態語もポップカルチャー等を通じて日々生み出され、それらが抵抗なく受け入れられていることを考えると、少なくとも母語話者の間には、擬音語・擬態語の知覚に何らかの共通した音韻法則があることが予測される。

Hamano (1986, 1998) は、日本語の擬音語・擬態語データを収集・分析する中で、「口蓋化の音象徴」を唱えた。口蓋化された音には

“UNCONTROLLEDNESS”，すなわち、「子どもっぽさ、未熟さ、不安定さ、信頼性の欠如、ぎこちない動き、多様性、制御できないエネルギー、やかましさ、気品の欠如、安っぽさ」が加わるというものである。口蓋化とは、子音の発話と同時に舌の中心部が口蓋に近づく現象で、「カ」が「キャ」になったり、「ソ」が「ショ」になったりするように、いわば「y」の音が加わることである。例えば、「カタカタ」というのは、「硬いものが硬い表面に当たった音」である一方、「タ」が口蓋化されて「チャ」となった「カチャカチャ」では、「鍵がお互いにぶつかり合うような音」となり、よりエネルギーが拡散した、統合性を欠いた音となる。また「ザブザブ」は「水しぶきが上がる様子」である一方、「ザ」が口蓋化して「ジャ」となった「ジャブジャブ」は、「そこらじゅうに水しぶきが上がる様子」となり、一方向ではない、より強いエネルギーが感じられる。

「口蓋化の音象徴」は、既存の日本語の擬音語・擬態語の分析から帰納的に導き出された法則性であるが、日本語母語話者が実際に擬音語・擬態語を知覚する際、「口蓋化の音象徴」は利用されているのだろうか。言い換えれば、口蓋化音の有無は擬音語・擬態語の知覚にどのような影響を与えるのだろうか。また、「口蓋化」という現象は、多くの言語で子どもの発話に見られる現象であるが、口蓋化された音に“UNCONTROLLEDNESS”が加わっているという感覚は、言語の壁を越えた普遍的なものであるだろうか。普遍的なものでない場合、学習者は日本語の学習過程でこの感覚を身につけていくのであろうか。本研究は、擬音

語・擬態語をより効率的に教える方法を模索するという観点から、擬音語・擬態語の「口蓋化の音象徴」を調査するものである。

2. 擬音語・擬態語の音の性質

日本語の擬音語・擬態語の語基は、基本的に2つのモーラ（拍）で構成されている（例：「カタ」、「トン」、「ザア」）。擬音語・擬態語が実際に用いられる際、これらの語基が取る形態はいくつかあるが、多くの場合2度繰り返されて4モーラ語として用いられる（例：「カタカタ」、「トントン」、「ザアザア」）。本研究では、この「重複形」に注目する。この節では、まずその音の性質をまとめて以下に述べる。

2. 1 子音と母音の性質

Hamano (1986, 1998) によると、擬音語・擬態語の語基の左端と右端の音の子音（例：「カタ」の左端は「k」、右端は「t」）は、それぞれ別の重要な役割を担っている。まず、左端の音の子音は物の触覚的性質を表していると言う。例えば、「k」や「g」は物が硬い表面を持っていることを示し、「s」や「z」は粘性のなさや、（軽い、小さい、または細かいものの）静かな様子を示している。一方、右端の音の子音は動作の種類を表すと言う。例えば、「k」は「開く、壊れる、晴れる、膨らむ、内側から放出する、浮き上がる、内側から外側へ動く」等の動作であり、「s」は「ソフトな接触、摩擦」が起こっている様子を表す。それゆえ、「クスクス」（「物が硬い表面を持っていること」＋「ソフトな接触、摩擦」→乾いた笑い）と「スクスク」（「粘性のなさ、（軽い、小さい、または細かいものの）静かな様子」＋「開く、壊れる、晴れる、膨らむ、内側から放出する、浮き上がる、内側から外側へ動く」→健やかな成長）は子音の順序が変わっただけなのに、全く異なった意味になるわけである。本研究では、これらの子音の性質を参考に、様々な子音の組み合わせに対応する絵を構築した。

一方、母音は右端と左端で別々の役割があるわ

けではない。多くの場合、2つのものの接触が擬音語・擬態語になるわけだが、それぞれの母音は2つのものの大きさや形、動きに寸法的な意味を与える (Hamano, 1986, 1998)。「i」は線状の様子や緊張感、「u」は突出や小ささ、「a」は大きい様子、そして「e」は下品さを表すⁱⁱⁱ。このように、母音は、寸法的な意味を与えるものであり、描写しているものの自体の動きや性質を根本的に変化させるものではない。それゆえ、本研究の新しい擬音語・擬態語構築の際には、個々の母音の役割を特に考慮しなかった。

2. 2 口蓋化の音韻規則

実在する「重複形」の擬音語・擬態語の分析によると、口蓋化には4つの規則がある (Hamano, 1986, 1998; Mester & Itoh, 1989)。第一に、ひとつの語基で口蓋化するのは一箇所に限られる。例えば、「カタ」の2つめのモーラのみが口蓋化した「カチャ」は可だが、「キャチャ」は不可である。第二に、語基に歯茎音 (t, d, s, z, n, r) が含まれていない場合は、最初のモーラが口蓋化する。例えば、「ボコ」は「ピョコ」となるのが正しく、「ボキョ」とはならない。第三に、語基に歯茎音が含まれている場合は、右端の歯茎音が口蓋化する。歯茎音が一つの場合は、その位置に関わらず、それが口蓋化する^{iv}。例えば、「ドサ」（左右共に歯茎音）は「ドシャ」となり、「トコ」（左端が歯茎音）は「チョコ」となる。第四に、歯茎音の中でも「r」は例外で、歯茎音でありながら口蓋化しない。例えば、「ノロ」は「ニョロ」となり、「ホロ」は「ヒョロ」となる。本研究では、新しい擬音語・擬態語を構築する際、この口蓋化の音韻規則に則った。

2. 3 口蓋化音を含む擬音語・擬態語の生産性

多くの「重複形」の擬音語・擬態語が口蓋化音を持つもの、持たないもののペアで存在している一方、全てにペアが存在するわけではない。Mester and Itoh (1989) は対応する口蓋化音を持つものがない例として、「バクバク」と「クラクラ」（「パキュパキュ」「キュラキュラ」は存在しない）を、対応する口蓋化音を持たないものがない例と

して「ムニャムニャ」、「ウジャウジャ」（「ムナムナ」、「ウザウザ」は存在しない）を挙げている。また、「ホロホロ」（上品に泣いている様子）と「ヒョロヒョロ」（やせ細っている様子）のように、ペアとして存在していても、ペアの関係性がはっきりしないものもある（Mester & Itoh, 1989）。

実際、口蓋化音を含む擬音語・擬態語は、全ての可能な組み合わせの中で均等に分散してはいない。Hamano (1986, 1989) のデータに従えば、子音の組み合わせでは、「p」「t」の順になる擬音語・擬態語（規則上、「t」が口蓋化して「t y」になる）は、「ポチャポチャ」、「ペチャペチャ」等、計4つ存在するが、「p」「z」の順になるもの（「z」が口蓋化して「z y」になる）はひとつも存在しない。同様に、母音の組み合わせでも、歯茎音を含む擬音語・擬態語では、「a」「a」は右端が口蓋化するものと左端が口蓋化するものを合わせると14個もある一方、「u」「u」は6個にとどまっている。歯茎音を含まないものの母音の組み合わせに至っては、「o」「o」が6個と「u」「u」が1個である以外の組み合わせは一切存在しない。本研究で構築した新擬音語・擬態語は、実際に存在する母音の組み合わせと実際に存在しない母音の組み合わせが半数ずつとなっている。その際、母音の組み合わせはひとつ以上あれば、いくつあっても「母音の組み合わせが存在するもの」として同等に扱った。なお、歯茎音を含まない擬音語・擬態語条件では、実際に存在する母音の組み合わせが非常に限られており、同様のコントロールをすると作成できる刺激が少なくなりすぎるため、これは実験刺激に含めなかった。

このように、既存の擬音語・擬態語の持つ音の性質を反映させながら新しい擬音語・擬態語を構築し、「口蓋化の有無」が状態・動作の知覚に与える影響を調査するための実験刺激とした。

3. 実験の目的

本実験の目的は、第一に、日本語母語話者が擬音語・擬態語を口蓋化の音象徴（すなわち、「口蓋

化音を含む擬音語・擬態語には、口蓋化音を含まない擬音語・擬態語に“UNCONTROLLEDNESS”が加わる）」に基づいて知覚しているか否かを調査することである。第二に、日本語学習者と非日本語話者の知覚の仕方を同時に調査することによって、この法則性が日本語特有のものであるか、あるいは、言語に普遍的なものであるかを検証することである。

4. 方法

4. 1 被験者

日本語母語話者、日本語学習者、及び非日本語話者のそれぞれ20人（計60人）が実験に参加した。日本語母語話者は日本で生まれ、幼少期に日本語でのみ教育を受けた人に限り、バイリンガルや帰国子女は含まれていない。学習者は、カンザス大学の「中級日本語2」（2年目の後期）を受講している英語母語話者の学生で、親戚に日本語母語話者が存在する継承語学習者は含まれていない。学習者の日本語は初級レベルであり、まだ授業で擬音語・擬態語は導入されていないレベルである。非日本語話者は日本語学習経験のない、日本語にほとんどふれることなく生活しているモノリンガルの英語母語話者である。

4. 2 実験刺激

Hamano (1986, 1998) のまとめた、既存の擬音語・擬態語の分類（母音の組み合わせ、子音の組み合わせ、どの音が口蓋化するか等）をもとに、「重複形」の擬音語・擬態語を48ペア構築した。各ペアは口蓋化された音が入っているものとならないものから成る（「カチャカチャ」と「カタカタ」等）。このうちの24ペアは左端の音が口蓋化したもので、残りの24ペアは右端が口蓋化したものである。また、Hamano (1986, 1998) のデータに基づいて、各グループの半数は母音の組み合わせが既存の擬音語・擬態語に見られるものを、また残りは既存の擬音語・擬態語に存在しないものを用いた。ただし、歯茎音を含まない擬音語・擬態語は、既存の擬音語・擬態語の中で母音の組み合わ

せが非常に限られており（2.3節参照），他の音と同様のコントロールができなかったために，実験刺激から除外した。

これらの擬音語・擬態語の新語（以下，新擬音語・擬態語）は，東京方言の日本語を母語とする女性により防音室で録音された。録音にはAudacityというソフトウェアを用い，それぞれ5回ずつ発話されたものの中から，最も適当なものを選んで実験刺激とした。

次に，Hamano（1986, 1998）の子音の性質による分類に基づいて，新擬音語・擬態語と口蓋化音を含むものと含まないものに対応する絵のペアを構築した。例えば，「サロサロ」と「シャロシャロ」及び，「スロスロ」と「シュロシュロ」の新擬音語・擬態語ペアに対しては，「s」の音を持つ「粘性のなさ，（軽い，小さい，または細かい

ものの）静かさ」という性質と「r」の音を持つ「回転，液体の動き」の組み合わせで，図1の絵のペアを構築した。口蓋化音を含む擬音語・擬態語には，“UNCONTROLLEDNESS”が加わるということで，一方の絵には，もう一方の絵に“UNCONTROLLEDNESS”として，「制御できないエネルギー」を加えた。同様の手順で24組の絵を構築した。他の例として「ペソペソ」と「ペショペショ」，「パスパス」と「パシュパシュ」に対応する絵のペア（「（軽い，小さい，または細かいもの）張り詰めた表面」と「ソフトな接触，摩擦」の組み合わせ）と「ノルノル」と「ニョルニョル」，「ノレノレ」と「ニョレニョレ」に対応する絵のペア（「粘性，粘着性，粘性性，動きの遅さ」と「回転，液体の動き」の組み合わせ）もそれぞれ図2と図3に示す。

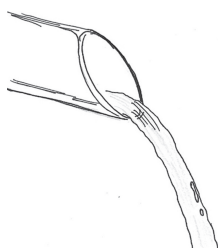


図1 S-Rの組み合わせに使われた絵



図2 P-Sの組み合わせに使われた絵

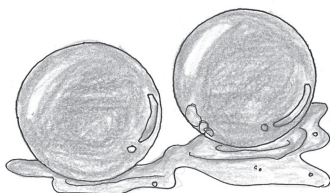
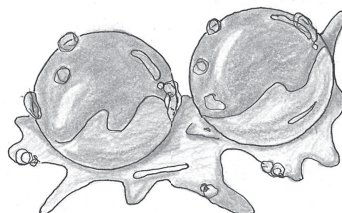


図3 N-Rの組み合わせに使われた絵



4. 3 手順

実験はParadigm (Perception Research Systems) という、実験コントロールのためのソフトウェアを使って構築した。ひとつの絵のペアに対して4つの音声がある(口蓋化音の有無×母音の組み合わせの有無)ため、同じ絵の組み合わせを続けて見るのを避ける目的で、各音声を4つのブロックに分けた。そして、それぞれのブロックの構成要素が同じになるように組み合わせた。すなわち、各ブロックには、新擬音語・擬態語の中で、口蓋化音を含むと含まないものが同数存在し、それぞれの半分は母音の組み合わせが既存のもの、残りは既存でないものとなっている。実験刺激は、各ブロックの中で被験者ごとにランダム化されるように設定し、ブロックの順番も4通りの方法を構築した。

実験の流れは、次の通りである。被験者は実験参加同意書にサインした後、コンピュータの前に座り、ヘッドフォンを装着する。実験が始まると、まず画面の中央に「+」サインが現れ、1秒後に新擬音語・擬態語の音声ヘッドフォンを通して流れる。音声が終わると同時に、ペアの絵が提示される。被験者は、その絵のどちらが、聞こえた音声により近いものであるかを判断し、出来るだけ早くマウスの左右ボタンのいずれかをクリックすることで回答する。回答の結果とそれにかかった時間は自動的にコンピュータに記録されるが、絵の提示後3秒経過すると時間切れとなり、画面からペアの絵が消えて、回答の結果及び時間は記録されない。これが24回繰り返されて1ブロックとなったものが全部で4ブロックあり、ブロックとブロックの間では自由に休憩がとれるようになっている。なお、同じ絵のペアが、各ブロックで二度以上提示されることはない。実験全体の所要時間は約15分である。

5. 実験結果

各グループ(日本語母語話者、学習者、非日本語話者)ごとの回答結果と反応時間の結果を図4、図5に示す。統計処理は、分散分析(「口蓋化の

有無」,「母音の組み合わせが既存の擬音語・擬態語に存在するかどうか」を被験者内要因,「グループ」を被験者間要因とする)を用いて行い、その後、各グループごとにも分散分析(「口蓋化の有無」,「母音の組み合わせが既存の擬音語・擬態語に存在するかどうか」を被験者内要因とする)を行った。さらに、母音の組み合わせがあるものと無いものそれぞれの中で、口蓋化音のあるものと無いものを t 検定で比較し、また口蓋化音のあるもの、無いものそれぞれの中でも母音の組み合わせがあるものと無いものを t 検定で比較した。

5. 1 回答の結果

分散分析の結果「口蓋化音の有無」($F(1, 57) = 11.64, p = .001$)と,「グループ」($F(2, 57) = 1032.88, p < .001$)で主効果が見られた。すなわち、全体的に口蓋化音を含む新擬音語・擬態語を聞いた際に「制御できないエネルギー」が加えられた絵を選ぶ傾向がより高く、その傾向はグループによって違いがあった。「母音の組み合わせが既存の擬音語・擬態語に存在するかどうか」の主効果は見られず、交互作用も一切なかった。

そこで、各グループにおいても分散分析を行った。日本語母語話者では「口蓋化音の有無」の主効果のみが有意であった($F(1, 19) = 8.67, p = .008$)が、学習者の間では、有意差は一切存在しなかった。しかし、非日本語話者の間では、母語話者同様に「口蓋化音の有無」にのみ有意な主効果が見られ($F(1, 19) = 5.48, p = .03$)、口蓋化音を含む新擬音語・擬態語を聞いた際に「制御できないエネルギー」が加えられた絵を選ぶ割合が高い傾向が見られた。

さらに、口蓋化音の効果を、母音の組み合わせが存在するものと存在しないものに分けて、それぞれ t 検定で調べたところ、全体としてはどちらの母音の組み合わせタイプにおいても、口蓋化音の含まれるものの方に「制御できないエネルギー」が加えられた絵を選ぶ割合が有意に高かった(母音の組み合わせの存在するもの: $t(59) = 2.57, p = .01$, 母音の組み合わせの存在しないもの: $t(59) = 2.52, p = .02$)。同様の結果が日本語母語話者でも

観察された（母音の組み合わせの存在するもの： $t(19) = 2.21, p = .04$ 、母音の組み合わせの存在しないもの： $t(19) = 2.35, p = .03$ ）が、学習者及び非日本語話者の間に有意差はなかった。また、母音の組み合わせの効果を、口蓋化音の含まれるものと含まれないものに分けてそれぞれ t 検定で調べたが、どのグループの比較においても有意差は存在しなかった。

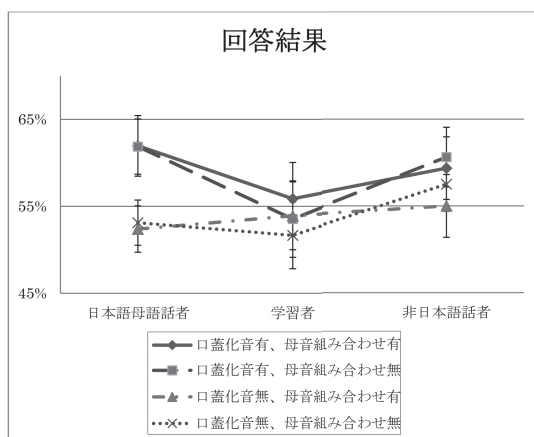


図4 'UNCONTROLLEDNESS' の加えられた絵を選んだ割合

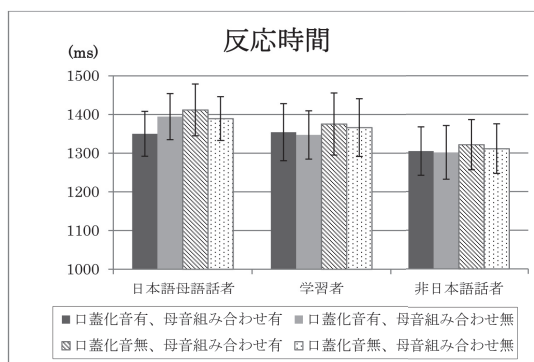


図5 反応時間の平均

5. 2 反応時間の結果

分散分析による全体の統計処理の結果「口蓋化音の有無」に有意な主効果が見られ ($F(1, 59) = -2.37, p = .02$)、口蓋化音が含まれる新擬音語・擬態語の反応時間の方が口蓋化音の含まれない擬音語・擬態語の反応時間より短かった。各グループ

ごとの分析では、日本語母語話者のグループに同様の主効果が見られた ($F(1, 19) = -2.18, p = .04$)。また、「口蓋化音の有無」と「母音の組み合わせが既存の擬音語・擬態語に存在するかどうか」の交互作用も見られた ($F(1, 19) = -3.51, p = .002$) が、これは、既存の母音の組み合わせがある口蓋化音条件での反応速度が、他条件と比較して特に短かったことに由来するものであると考えられる。学習者と非日本語話者グループには有意差は一切なかった。

また、口蓋化音の効果を、母音の組み合わせが存在するものと存在しないものに分けてそれぞれ t 検定を用いて調べた。グループ総合では、母音の組み合わせが存在する条件で、口蓋化音の含まれるものの反応時間が有意に短くなっており ($t(59) = -2.37, p = .02$)、日本語母語話者でも同じ結果であった ($t(19) = -2.18, p = .04$)。さらに、母音の組み合わせの効果を口蓋化音の含まれるものと含まれないものに分けてそれぞれ t 検定で調べたところ、母語話者の口蓋化音同士の比較のみににおいて、母音の組み合わせが存在するものの反応時間が有意に短くなっていた ($t(19) = 3.51, p = .002$)。これによって、日本語母語話者は、母音の組み合わせが存在する口蓋化音条件の反応速度が、他条件に比べて有意に短いことが示された。

6. 考察

本研究では、日本語母語話者が擬音語・擬態語を「口蓋化の音象徴」(Hamano, 1986, 1998) に基づいて知覚しているか否かを調査した。また、日本語学習者と非日本語話者の知覚状況を同時に調査することによって、この音象徴が日本語特有の法則性であるかどうか、また日本語学習経験によって得られる感覚であるのかどうかを検証した。その結果、日本語母語話者の間では、口蓋化音の含まれる新擬音語・擬態語に「制御できないエネルギー」をより強く感じる傾向が顕著に見られた。反応時間では、母音の組み合わせが実際に存在する擬音語・擬態語の口蓋化条件で特に短い傾向が見られたが、それは母音が聞きなれている

組み合わせだったことで、聞いた新擬音語・擬態語と同じ子音の組み合わせを持つ既存の擬音語・擬態語と関連付けやすかったことが一因と考えられる。いずれにしても、日本語母語話者の間では、擬音語・擬態語を知覚する際の「口蓋化の音象徴」の利用が顕著であった。

一方、日本語学習者グループには、母語話者と似た「口蓋化の音象徴」の方向性が見られないわけではないが、有意差はなかった。しかしながら、非日本語話者グループでは「口蓋化音の有無」には、母語話者と同様に、有意差があった。日本語とほとんど接点のない英語話者が、日本語の新擬音語・擬態語に「口蓋化の音象徴」を用いているということは、この法則性が日本語特有のものではないことを示唆している。しかしながら、学習者には「口蓋化の音象徴」を利用している様子が見られなかった。一般的に、学習者はその言語での経験が増えるに従って、その言語における様々な法則性の利用度が増加すると予想されるが、ここでは、非日本語話者と日本語母語話者が利用している「口蓋化の音象徴」が学習者では利用されていないのである。なぜこのような状況が起こったのであろうか。

そもそも、状態・動作の描写を音で表現するというのは、英語ではごくまれであり、聞こえてくる音声と絵をマッチさせるというこの実験課題は、日本語の擬音語・擬態語の知識のない英語母語話者には難しい課題であろう。この課題に取り組む際、日本語の知識がない非日本語話者なら、母語である英語（及び、それぞれが過去に学習した日本語以外の外国語）の感覚に従って判断するしかない。一方、学習者はどうであろうか。これが日本語の実験であるが故に、母語の感覚をできるだけ使わず、日本語の音声的知識のみを利用しようと試みたということは考えられないだろうか。口蓋化音は日本語の多くの単語やフレーズに含まれているわけだが、「宗教」、「業界」、「中継」等の例からわかるように、一般の単語学習に於いて、口蓋化音が“UNCONTROLLEDNESS”と結びつくとは考えにくい。すると、日本語の単語やフレーズの学習、及び擬音語・擬態語導入以前の教

室活動で、口蓋化音に「制御できないエネルギー」があるという音声的な感覚を身につけることは難しいかもしれない。それゆえ、学習者グループでは、聞こえてくる音声と状態・動作の描写である絵に関連付ける際、日本語学習で得た音声的な知識を利用しようとしたために、却ってそれが本来持っている感覚である「口蓋化の音象徴」の利用を妨げたのかもしれない。しかしながら、擬音語・擬態語が授業で導入された後の中・上級の学習者が、「口蓋化の音象徴」をどの程度利用しているかは不明である。したがって、日本語学習者が擬音語・擬態語の学習後に、「口蓋化の音象徴」の感覚を取り戻すことができるのかどうかを今後調査していく必要があるだろう。

7. 教育への提言

数多くの擬音語・擬態語を学習するには、単語の学習と似た忍耐が必要だろう。しかも音のない状態・動作と音の羅列に関連付けるとするのは、非日本語母語話者にとって、理解しにくい作業であるかもしれない。しかし、学習者が、その音の羅列に規則性を見出した時、学習は易しくなるのではないだろうか。

本研究では、「口蓋化の音象徴」が日本語特有のものではなく、非日本語話者も利用できるものであることが示唆された。例えば、「カタカタ」と「カチャカチャ」という2つの擬音語は、口蓋化音の有無によって意味的に関連づけて学習できるはずだということである。しかし、学習者は、その本来持っているはずの感覚を、改めて教えられることなしには使うことが難しい様子が示された。それゆえ、擬音語・擬態語を導入する際、「口蓋化の音象徴」を提示する必要があると考える。そうすることによって、より効率的に教えることが出来るだろう。

あるいは、日本語的な音声感覚が確立する前（つまり、「口蓋化の音象徴」が非日本語話者と同様に使える時期）から擬音語・擬態語を口蓋化有無のペアで少しずつ導入することはできないだろうか。擬音語・擬態語が初級段階で導入されない

のは、そのコンセプトが非日本語母語話者には難しいことが一因だと考えられている (Iwasaki et al., 2007)。しかし、日本人の子供や、非日本語話者が、動詞を覚えるよりも擬態語を覚えることに成功している実験報告もあり (Imai et al., 2008; Kantartzis, et al., 2010)、実際は、擬音語・擬態語学習は考えられているほど難しくないのかもしれない。擬音語・擬態語の学習が、学習者にとってどれだけ難しいものであるのかは、今後さらに研究が必要であるが、初級から擬音語・擬態語の学習が始められれば、それらに触れる機会も格段に増加するであろうし、学習者にも定着しやすくなると考える。

本研究では、「口蓋化」という擬音語・擬態語の一側面に注目して実験を行ったが、子音の性質に関する法則性等、他にも一般化できるものが存在する可能性は大いにある。今後、それらを解明しつつ、擬音語・擬態語学習の難易度を究明することで、より効果的な擬音語・擬態語の導入法が開発できると考える。

参考文献

- Hamano, S. (1986). *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Florida.
- Hamano, S. (1998). *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford, CA: CSLI Publications; Tokyo: Kuroshio.
- Huang, Y.-H., Pratoomraj, S., & Johnson, R. C. (1969). Universal magnitude symbolism. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 8, 155-156.
- Imai, M., Kita, S., Nagumo, M., & Okada, H. (2008). Sound symbolism facilitates early verb learning. *Cognition* 109, 54-65.
- Iwasaki, N., Vinson, D., & Vigliocco, G. (2007). What do English speakers know about gera-gera and yota-yota: A cross-linguistic investigation of mimetic words for laughing and walking. *Japanese-Language Education around the Globe*, 17, 53-78.
- Kantartzis, K., Imai, M., & Kita, S. (2010). Japanese sound-symbolism facilitates word learning in English-speaking children. *Cognitive Science*, 35, 578-586.
- Kohler (1929). *Gestalt Psychology*. New York, USA: Liveright.
- Mester, A. & Itoh, J. (1989). Feature predictability and underspecification: Palatal prosody in Japanese mimetics. *Language*, 65, 258-293.
- 三上京子 (2007). 日本語教育のための基本オノマトペ

の選定とその教材化 ICUの日本語教育研究, 3, 50-63.

Ramachandran, V. S. & Hubbard, E. M. (2001). Synaesthesia--a window into perception, thought and language. *Journal of Consciousness Studies*, 8, 3-34.

Shibatani, M. (1990). *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

謝辞

この論文の実験・執筆に当たり、ご協力いただきました多くの方にこの場を借りて深く感謝致します。特に、平野絵理香氏、Robert Fiorentino教授、江田早苗教授、葉袋詩子教授、中田琴子氏に心より感謝申し上げます。

注

- i 一般的に、擬音語はカタカナで、擬態語はひらがなで表記されるが、ここでは擬音語・擬態語の区別をせずにカタカナで表記する。
- ii Shibatani (1990) は、感情を表すものを「擬情語」として「擬態語」と区別している。この論文で扱う「新擬音語・擬態語」には「擬情語」は含まれない。
- iii Hamano (1986, 1998) によると、「o」は大きくもなく小さくもない。突出性や線伏性もない。三上 (2007) によると「うちにこもる感じ」とある。
- iv Hamano (1986, 1998) によると、「キョトキョト」は歯茎音でない部分が口蓋化している唯一の例外である。